

桜蔭俳話会 六月句会 (第三八四回) 選句結果

令和二年六月二十五日 (メールによる句会)

)

推薦句

来し方は一つの歴史なめくじり 秀夫

梅雨曇喫茶のテーブルに指環 秀夫

薫風とふしをり文庫にはさみけり 秀夫

名を呼べば目をあけて梅雨の犬 才美

全身を空つぽにして夕焼中 才美

億年の地層の上の蛍火よ 才美

梅雨の街コロナしごとく生きてをり 明美

支持率の真つ逆さまに梅雨に入る 明美

タクシーの空車の列や梅雨に入る 明美

梅雨入りやまだ滲み足らぬ土の色 潤子

梅雨晴れ間珈琲の香と再会と 潤子

コロナ禍の梅雨にこもりて昼の酒 いつ子

さみだるる雲の重さや鳥ひとつ いつ子

梅雨曇心に菓食う黒きもの ヤエ子

居眠れる羅漢に苔や梅雨晴間 友子

母の日の母へ土鈴を鳴らしけり 直子

サラダ好きサクサク刻む梅雨の朝 和幸

半夏生スマホゲームに日が暮れる 眞壽

要推敲句

原句 蛍火や寄り添うベンチ影二つ 眞壽

添削案 蛍火や寄り添ひてゆく影二つ 眞壽

原句 つゆ入りや雨に咲く花いと眩し 和幸

添削案 つゆ入りや濡れたる花のいと眩し 和幸

原句 万緑や吾子とコロツケパン食す 直子

添削案 万緑や吾子と囲みしコロツケパン 直子

原句 テキーラのグラス乾しけり誘蛾灯 秀夫

添削案 テキーラのグラスほしけり誘蛾灯 秀夫

原句 舗装路を蛇悠々とくねりゆく ヤエ子

添削案 舗装路を綺麗な蛇のひとり占め ヤエ子

原句 梅雨晴間窓のかたちにシーリング 明美

添削案 梅雨晴間窓のかたちに影ひとつ 明美

原句 コロナ禍のカラフルマスク梅雨の人 いつ子

添削案 コロナ禍のマスク模様や梅雨深し いつ子

原句 睡蓮の精が風に風が来て 直子

添削案 睡蓮の精のる風の来たりけり 直子

原句 六月に白き花咲く名を問へり 眞壽

添削案 名を問ふは六月のこの白き花 眞壽

原句 山道の叫びや蛇と見間違ふ 友子

添削案 山道の金切り声や蛇の衣 友子

原句 悪意なき蜈蚣にしかと悪意持ち 潤子

添削案 蜈蚣には理不尽なれどみな悪意 潤子

原句 白髪染め止めると決心五月晴 ヤエ子

添削案 五月晴これが最後の白髪染め ヤエ子

原句 夕立や滴り走る窓の棧 眞壽

添削案 夕立や滴りひとつ窓の棧 眞壽

原句 腹ばひて墨吐く龍や梅雨の雲 いつ子

添削案 腹ばひの墨吐く龍や梅雨の雲 いつ子

原句 ウイズコロナに暮らす老後や冷奴 友子

添削案 ウイズコロナに暮らす老後や冷奴 友子

原句 常在のコロナウイルス冷奴 友子

添削案 常在のコロナウイルス冷奴 友子

原句 果実三種香り漂う梅雨の部屋 和幸

添削案 乱切りの果実三種や梅雨の部屋 和幸

原句 丸き四葩へ顔埋めたき蟄居明け 友子

添削案 丸き四葩へ顔埋めたき蟄居明け 友子

原句 蟄居明け四葩の鞠へかほ埋め ヤエ子

添削案 蟄居明け四葩の鞠へかほ埋め ヤエ子

原句 草陰へ蚯蚓消ゆるをそつと待つ 友子

添削案 草陰へ蚯蚓消ゆるをそつと待つ 友子

原句 訪ふや十薬煎じたる句ひ 直子

添削案 訪ふや十薬煎じたる句ひ 直子

原句 十薬を煎じし母の居室かな 直子

添削案 十薬を煎じし母の居室かな 直子

原句 友危篤奇跡を祈る梅雨寒し 和幸

添削案 友危篤奇跡を祈る梅雨寒し 和幸

原句 回復の奇跡を祈る梅雨寒し 和幸

添削案 回復の奇跡を祈る梅雨寒し 和幸

原句 五月雨や手縫ひのマスクの布選ぶ 友子

添削案 五月雨や手縫ひのマスクの布選ぶ 友子

原句 五月雨や手縫ひのマスクの布模様 友子

添削案 五月雨や手縫ひのマスクの布模様 友子

原句 風五月木々のささやき終い風呂 友子

添削案 風五月木々のささやき終い風呂 友子

原句 薫風の木々のささやき露天風呂 友子

添削案 薫風の木々のささやき露天風呂 友子